

炎気揚揚

第5号

暑い熱い「アツい」夏に輝く君たちへ

コロナ禍は続くものの、4年ぶりに制限のない夏を迎えました。夏と言えば、皆さんは何を思い浮かべますか。海、山、セミの声、キャンプ、プール・・・イメージすることは暑さを気にすることのない外での活動を楽しみにしていることの方が多かったのではないのでしょうか。

また、夏だから暑いのは当然であり、「今日は夏日だ!」「今夜は蒸し暑いなあ」「初夏だね」「残暑厳しいね」など、どちらか言えば夏の暑さを通して、お互いの心を通い合わせるような「暖かさ」を感じる表現だったと思います。ところがここ数年、「猛暑」「酷暑」「激暑」「炎暑」など、これ以上、夏の暑さを表現できないような文字が連日報道されています。特に、この夏はついに「命に関わる危険な暑さ」となり、外に出ることがとても不安な毎日だったと思います。

私の高校時代も、朝の涼しい内に勉強したり、部活動をしたりすることが当たり前でした。暑さによって自分の力を発揮できないだけでなく、当時は日射病と言われていましたが、暑さによって健康を害することが無いために、必要な避暑方法でした。

しかし、今では、朝7時から夜遅くまで常に30度を超え、涼しさなどは1日の中に存在しないのが現状です。ちなみに一般に「猛暑日」と言われるのは35度以上になった日です。1980年代は、年間を通して2日程度であった猛暑日でしたが、年々増加し、2017年には13日、昨年今年もなんと10日を超えています。このままでは、暑さの表現も変わっていくかもしれません。

■令和5年度の夏休み、炎暑が続く中、私は、甲子園を目指す野球部の応援、インターハイに出場した相撲部の応援、関東大会出場を果たしたバレーボール部の合宿訪問、吹奏楽部の演奏発表に足を運び、生徒に声をかけてきました。私は、部員の皆さんへ、いつも伝えることがあります。それは、試合や発表など、いざ本番において、一番乗り越えなくてはならないことは、見えない敵との戦いであること。その敵とは、夏の暑さでもなく、勝利や演奏に向けた熱い思いでもありません。皆さん一人一人を誇りに思い、真心を込めた「アツい」思いです。勝っても負けても、うまくいってもいなくても、皆さんには、アツい思いを持って関わる顧問の先生方がいることを忘れないでほしいからです。

相撲部が出場した北海道の全国大会でのことです。選手の一人が取組の中で、怪我をして負けてしまいました。会場が騒然となる中、私も気が付くと選手たちに駆け寄っていました。怪我した選手と心配そうに寄り添う部員の目には、この試合にかけていた熱い思いが涙となって溢れていました。私も込み上げてくる涙を抑えることに必死でしたが、仲間のアツい思いによって支えられている選手を見て、本校校長であることを誇りに思いました。この夏の出来事は、きっと皆さんの心の中に刻まれて、生涯の思い出となって熱く輝き続けることでしょう。頑張れ新田生!

令和5年8月

